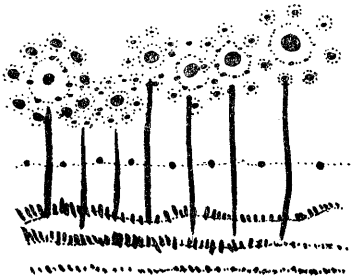
子どもたち――春・夏・秋――

古屋あこ

子どもとの関わり合いの中では、さまざまな感情を体験することができます。子どもは、気持の揺れ動く様をむき出しで表すからでしょうか。それに応じるこちらの気持ちも、体当たりのものになるようです。

子どもとの間に触れ合いを感じた時には、何度も思い返してはその喜びを味わいます。それがまた次に子どもと接する時の栄養源となります。逆に、心無い接し方をしてしまっ



た時には、どうかその体験が子どもにとって重要な影響を持ちませんように、子ども達の心の中に残りませんように…と願い、二度と失敗を繰り返さないよう戒めます。

一日を終えて、子ども達との楽しいやりとりを思い出したり、もっとこうすればよかったなどと考えることは、自分の保育を育てるうえで、大切なことのように思えます。一人一人の子どもの状態がどうであったか、その時、自分がどのように行動したかを知ることができるからです。さまざまな感情を改めて体験することもできます。

どうして子どもはこんなに私を魅きつけるのでしょう。子どもは魔法使いのように、次から次へと奇跡をひきおこします。この小さな奇跡に私はいつも驚かされ、子どもの不思議な力に感服せざるを得ないのです。保育者としてはまだ誕生日を迎えていない私が感じた、そんな小さな奇跡について、ここでお話ししたいと思います。

私が最初に子どもとの間に得た了解は、たぶんあの子どもの笑顔だったでしょう。子ども達の多くは、大人から愛されていることを信じ、愛してくれる大人を信じます。

彼らの愛情表現は実にさまざまです。走ってきてドーンとぶつかったり、そばへ来て、そっと手をつないだり、泥んこの手をふざけてなすりつけたり、治った傷を「痛い。」と言って見せに来たり……。しかし、どんなことをしていても、その笑顔で「わたし、先生がだいすき。」と言っていることがわかってしまいます。こちらも「先生はあなたが大好

きよ。」と応えるために、抱っこをしてあげたり、手をつないだり、「コラッ」と怒ってみせたり、ばんそうこうを張ってあげたりすることになります。こうして子どもと教師の間に暗黙の了解が成りたつと、子どもは満足して、自分の遊びへと帰って行きます。

こんなことがありました。けんちゃんは、車に乗ったり、剣を振りまわすことが大好きな元気な男の子です。ある朝、車に乗ってそばへ走って来て、小さな声で「おうち、もう帰りたい。」と言いました。『あれ、とても楽しそうに遊んでいるのに、やっぱり、ふとそう思うことがあるのだなぁ。』と少々驚きながらも、「そう、もうおうちへ帰りたいの。」と確かめると、「うん」という返事。こちらも困ってしまい「じゃあね……もう少ししたらお片づけになるから……そうしたらおいしいお弁当持って来たでしょ？それを食べて、ちょっと遊んだら帰ろうか……。」すると、けんちゃんの顔は急にぱっと輝いてにっこり。こちらもほっとしてにっこり。「じゃあそれまでまだあるから遊んでらっしゃい。」と言うと、ニコニコしながらビューンと車を走らせ行ってしまいました。その後、けんちゃんが元気に一日を過ごしたので、よかったなと思うと同時に、小さな奇跡が起こったのかしらと思いました。笑顔の了解はとてもすてきなもののようです。

体当たりでぶつかっていくことが、小さな奇跡をひきおこすこともあります。言葉の内容からよりむしろ熱意から、子どもは本能的にこちらの気持ちを察するようです。真剣に伝えればそれは子どもの中にストーンと入っていきますし、真剣でなければ、子どもはそ

れを受けとめず、知らん顔をして次の行動へと移ります。

叱ることはどうしても日常必要になってきますが、叱る時の真剣さもそのまま子どもに反映されるようです。内心「まあいいかな。」と思いながら叱ると子どももいい加減にきいていたり、逆に、「これはわかってもらわなければ。」と思いながら説明すると、子どもは神妙な顔つきできいています。

こんなことがありました。まさ君は遊びがとても活発で面白い子ですが、自分中心になんでも進めたがるので、回りの子とよくぶつかってけんかになってしまいます。ある日、イスに座る時、好きな女の子と一緒に座りたくて、その子の隣に座っていたまりちゃんに噛みついてしまいました。「どうして噛んだの？。」ときくと「だって僕、ここに座りたいんだよう！」の一点張りです。まりちゃんに席を譲ってもらいたいならば言葉で頼まなければいけないことを説明すると「やだょー！　だって僕ここに座りたいんだ」とまりちゃんをぐいぐい引っ張って無理矢理イスから立たせようとします。まりちゃんはワンワン泣いています。「そんな風にしたら誰だって譲ってくれないわよ。頼むのならお口で言いなさい。」と言うと「かわって！」と地団駄を踏んで叫びます。これではまりちゃんがかわってくれるはずがありません。

まさ君は自分の思い通りにいかないので、自分でもどうしたらよいのかわからなくなり、「やだよー。」と言い手をふり回して、まりちゃんをぶとうとします。こちらも見かねて「でも、まさ君がいけないのよ。噛んだりしたから。どうして噛んだりしたの？　まり

ちゃんかわいそうでしょ？」ほら、お顔見てごらん。」まさ君はまりちゃんの涙でくしゃくしゃの顔を見ると睨みつけて「あやまればいいんでしょ。ごめんね！」と投げやりに言います。どうやらあやまれば済むと思っているようです。「ううん。そんな言い方では心がこもっていないんじゃない？　本当に悪いことをしたと思うのなら心の底からあやまって。」強い口調にまさ君は少しびっくりしたようです。皆がシーンとして取り囲んでいる中で、小さな声で（それは本当にやさしい声でした。）「ごめんね。」と言うと、わっと泣いて、私に抱きついてきました。「まさ君、あやまれて偉かったね。」まさ君の持った勇気に私は感嘆しながら言いました。

子どもの成長もまた、小さな奇跡を感じさせます。入園したての頃は物を取り合って頻繁にけんかがおこりますが、そんな時はなるべく「貸して。」と言ったり、「いいよ。」「後で。」など口でやりとりができるように教えています。車の大好きな、ひろ君も、最初は欲しい車があるとそばへ寄っていって力づくで奪ったり、手に入らないと怒って相手の顔をつかんだりして、けんかが絶えませんでした。「貸して。」まで言えても、「後で。」と言われると待てないので、結局けんかになってしまいます。ある日のこと、いつものように自分の乗っている車より友達の車に乗りたくなって、ひろ君は「貸して。」とその子に言いました。ところが返事は「後で。」ひろ君は一瞬とまどってから、少し考えているようでした。『ああまたけんかになるなぁ。』と思いながら見ていると、ひろ君は突然私の顔を

見上げてニヤッと笑うと残念そうに「じゃあまた後で貸してね。」とその子に言い残し走り去っていきました。それからだんだん物の取り合いのけんかも減り、ひろ君も徐々に我慢ができるようになったようです。

入園当時カチカチだった子が、慣れてくると手に負えない程のいたずらっ子になる。一人でメソメソ泣いていた子が、気の合った友達を見つけていつも一緒に手をつないでいたり、一緒にお人形を抱いて「そうよね。」とおしゃべりをしていたりする。前の事を思い出して思わず苦笑してしまうのですが、そんなことにも小さな感動があります。

入園してから半年後の間にさまざまな奇跡をひきおこした彼らは、これからどんな奇跡をひきおこすのでしょうか。彼らが残り二年半の間に引きおこす事件はとても想像がつきません。

（東京・神田寺幼稚園）